

IC-15 高次精神活動により誘発される
反射てんかん21例の病態生理

大阪大学健康体育部 梅新診療所^{*1}
大阪大学精神科^{*2} 大阪外国語大学^{*3}

○山本 忍 山本順治^{*1} 河崎建人^{*2} 山下 仰^{*2}
志水隆之 梶本修身 保坂直昭^{*2} 北脇公雄^{*2}
白石純三 志水 彰^{*3}

高次精神活動により誘発される反射てんかんの報告は稀である。しかし最近、若年ミオクロニーてんかん(JME)がこれらの反射てんかんと類縁性を有するとの報告がなされ、注目されている。我々は今回JME 41例のうち21例(51.2%)に高次精神活動に対する反射性を確認し、その病態生理につき検討を加えた。

〈対象・方法〉JME 41例に対し複数の神経心理学的脳波賦活を施行し、21例に反射性を確認、それらの有効賦活因、誘発された臨床発作、異常脳波を検討した。また21例中12例に対し脳波モニター下で安静時、賦活時の¹²³I-IMP SPECTを施行し検討した。

〈結果〉21例の有効賦活因は強い精神緊張下での高次精神活動であるが、その内容からそろばん算、書字など手指の随意運動を必要とする13例、ゲームの際の意志決定など運動を必要としない8例の2群に分類し得た。誘発される臨床発作は両群共に上肢のミオクロニー発作であったが、前者は利き手側の手指の細かいミオクロニーであるのに対し、後者は利き手から両手にかけての粗大なものであった。誘発される異常脳波は、優位半球側から両側中心部優位の全般性棘徐波であったが、前者ではしばしば優位半球中心部に焦点性が認められた。また多棘徐波の出現は稀であった。後者では焦点性を示すことは稀であり、しばしば多棘徐波の出現を見た。

SPECT異常は12例中8例(66.7%)で認められ、その内容は皮質の血流分布異常および/あるいは片側視床の血流低下であった。8例中4例はこれら両方の所見を合わせ持ち、3例は皮質の異常のみを、1例は視床の異常のみを示した。また皮質の異常所見(5例で増加、2例で減少)は1例を除き賦活時のみに、視床の血流低下は1例を除き安静時、賦活時共に認められた。SPECT異常の部位は脳波焦点と40.0%でほぼ一致し、視床については50.0%が脳波焦点と同側であった。なおX-CTあるいはMRIでSPECT異常部位に一致した異常所見が認められたのは1例のみである。

以上の所見よりこれら反射てんかんの病態生理につき考察する。

IC-16 テレビゲーム誘発性発作を有するてんかん児の
臨床脳波学的特性

弘前大学小児科^{*1}, 弘前市立病院小児科^{*2}, 岩木病院小児科^{*3}, 三戸町立病院小児科^{*4}

○村中秀樹^{*1}, 長利伸一^{*1}, 児島 雅^{*1}, 塩谷睦子^{*2},
小出信雄^{*1,3}, 渡部 準^{*4}

テレビゲーム(以下TV-GAと略す)の爆発的普及により、ゲーム中にけいれんをはじめとする発作を生ずることが、社会問題となっている。しかし、その臨床脳波学的特性は、多数例で検討され、解明されているとは言い難い。今回、我々は、TV-GAにより誘発される発作を有する10症例のてんかん児において、その臨床脳波学的特性について検討したので報告する。

〔対象および方法〕対象は、弘前大学小児科および関連病院にて経過観察中のてんかん児の中で、TV-GA誘発性発作を有する10例である。10例中、6例はTV-GA中の発作を主訴として病院を訪れ、残り4名はてんかんとして経過観察中にTV-GAにて発作を生じた。10症例は男児のみで、現在年齢は、平均約12.4歳、TV-GAによる発作の初発年齢は、平均約9.7歳で、平均経過観察期間は約3.1年であった。10症例の発作症状、家族歴、既往歴、経時的発作間欠時脳波所見、脳CTあるいはMRI所見、抗てんかん剤および発作の残存、精神遅滞の有無などについて、光過敏性を有する群(A群)と有しない群(B群)に分けて比較検討した。

〔結果〕1) A群B群はともに5例ずつであった。2) 輝点、盲などの視覚症状はA群3例、B群2例でいずれの群にも認められた。3) TV-GA中の発作型はA群では強直間代けいれんが1例に、A群の残り4名とB群全例は部分発作と推定した。4) 発作間欠時脳波上、A群では5例全例が後頭部を含む多焦点性発作波を有し、うち4例に不規則全般性発作波が認められた。一方、B群では、不規則全般性発作波は1例のみで、多焦点性発作波2例(後頭部を含む1例)、焦点性発作波3例(後頭部2例)であった。5) A群では4例に抗てんかん剤を使用したのが全例で発作は消失し、B群では全例に抗てんかん剤を使用したのが、2例に発作の残存を認め、画像診断上所見を有する症例のみであった。

〔結論〕TV-GA誘発性発作を有するてんかんは、Jeavonsらの純粹光過敏性てんかんのみとは言えず、むしろ、後頭葉を主体とする局在関連性てんかんが多いようである。